

認知症は生活崩壊の元、とは  
言いたくない！

～早期発見の意義再考～

10分で読める！介護現場をよくするシリーズ

天晴れ介護サービス総合教育研究所 株式会社

---

## 本レポートの特徴と使い方

■本レポートは、平成 20 年第 21 回 G E ヘルスケア・エッセイ大賞にてアーリー・ヘルス賞を受賞した時の作品です。以下、当時の情報になります。

タイトル : 「認知症は生活崩壊の元、とは言いたくない！！  
ー 早期発見の意義再考 ー」

提言のポイント : 認知症を予防する、治すということが盛んに言われる中、認知症になった場合に、それ以上悪化させないという発想と方法。また、認知症になっても、安心して生活できる社会づくりの必要性を提案します。

応募部門 : 一般部門

氏名 : 榊原宏昌 (サカキバラヒロマサ)

年齢 : 30 歳

性別 : 男

職業 : ケアマネジャー

---

「認知症は生活崩壊の元、とは言いたくない！！ ―早期発見の意義再考―」

風邪は万病の元、という言葉になぞらえて、  
「認知症は生活崩壊の元」との言葉を考えてみたが、  
本当はこのような言葉は使いたくない。

僕は認知症という障害を、単なる病気というよりは、  
もっと人間的で自然な老いというものと関係して捉えるべきだと考えている。

閉じこもりや孤独、生活の不活発化といったものが認知症を引き起こし、  
脱水や便秘が認知症の症状を悪化させることは広く知られている。

また、認知症の周辺症状である俗に言う問題行動は、  
脳の病理学的変容によるものだけではなく、  
老いに伴う人間的变化、その方の生きてきた姿と密接に関係しているとの説も、  
実際に認知症を持たれている方と接する中では自然に理解できることだろう。

僕が「認知症は生活崩壊の元」という言葉に抵抗があるのは、  
こうした認知症観に由来している。

つまり、認知症がその方の人生や生活と密接に関わっていると考えた時、  
認知症が諸悪の根源のような病であり、  
ひどく忌むべきもののように扱われることは、  
その方の「これまで生きてこられた姿」や「今生きている姿」そのものを否定しかねない、  
と思われるからである。

認知症という障害をあまり悪者のように言いたくないのだ。  
「認知症は生活崩壊の元」などとは言いたくないのである。

とはいえ、「認知症は生活崩壊の元」と言わざるとえない現実がある。  
認知症という障害が、恐ろしいものであることもよく承知している。

上手に付き合えないと、ご本人にとってはもちろん、  
ご家族をはじめとする周囲の人々にとって、  
まさに「生活崩壊」の元となりうるものだ。

---

そうはさせたくない、というのが僕の願いであり、  
「認知症が生活崩壊の元」とはさせないための入り口として、  
「早期発見」の意義を改めて考えてみたい。

そして、認知症を持たれている方、そのご家族が、認知症という障害があっても、それぞれにその方らしく生きられるための発想の転換や社会づくりの必要性について書いてみたいと思う。

\*

僕は昨年まで認知症の方を対象とするグループホームに勤めていた。  
その頃の体験に基づいて言えば、  
偶然かもしれないが、認知症の症状が落ち着いてきてから入居される方が多かった。

入居前の話をご家族にお聞きすると、  
「1、2年前は大変でした」  
「家族が泥棒扱いされて、それを近所の人に言いふらしたりしていました」  
「孫とケンカの絶えない日々で・・・、あんなに面倒見のよかったおばあちゃんが」  
というように、それぞれに大変な時期を越えてきている。

このような一種、嵐とでも言うべき時期を越えて、  
少し落ち着いた頃に入居が決まり、ようやくホッとできる、という方が多かった。

そして、グループホームにおいては24時間の介護が受けられることとなり、  
ご家族以外の人と接する機会が増えるためか、  
言葉は悪いかもしれないが「かわいらしくボケる」という状態となることが  
多いようでもあった。

そうすると、「あの頃は大変だったけど、今はこうして会いに来るのが楽しみ」と、  
ご家族もおっしゃるようになる。

これはとても素晴らしいことだと思うし、  
グループホームの存在価値、もっと言えば介護サービスの存在価値でもあると思うのだが、  
入居前の話を聞くにつけ、その「嵐の時期」にこそ、  
グループホームに限らず、  
訪問や通所、または短期入所といった介護サービスが必要とされているのではないかと  
常々感じてきた。

---

認知症の進行具合には色々なパターンはあるだろうが、  
こうした「嵐の時期」にこそ生活崩壊の危機があり、  
そこをどのように乗り切るかという知恵が必要となる。

もう一步踏み込むなら、  
嵐の時期を「起こさせない知恵」が求められているように思う。

そのための入り口が「早期発見」だと考えている。

題名で「認知症」を「風邪」になぞらえたのは、  
つまり「こじらせてしまうと怖い」からである。

認知症もその初期に適切な介護や関わりを経ないと、  
こじらせてしまうことになり、  
ご本人、ご家族の生活崩壊を招いてしまう。

そしてそうなってしまってからでは改善は困難を極める。

僕は、認知症を家庭内だけで解決していこうとするのは、  
正直無理があるように感じている。

「家」という生活空間は、外へは自由に容易に出て行けるし、火を扱う場所もある。  
階段はあるし、手を伸ばせば口にはいけない薬品や洗剤などもたくさんある。

自由であり、気ままであり、何よりなじみのある家なのだから、  
人が生き生きと暮らすには大切な空間ではあるのだが、  
こと認知症を持たれた方にとってはこれほど危険がいっぱいの空間もないと言える。

それで危険を避けようとして、認知症の方の行動を制限しようとする、  
途端に人間関係は悪化し、いわゆる問題行動は激しさを増し、  
認知症の進行を助長することになってしまう。

これが「こじらせてしまう」ということであり、  
こうなるとご家族のストレスも激増する。

制限せずに優しく見守る、というのは言葉ではたやすいが、  
ご家族にとってみればほぼ 24 時間、ご本人の行動を見守るということに等しく、  
全く現実的ではない。

---

身体の元気な認知症の方が一番大変である、というのはこういった状況であり、  
皮肉にも身体の不自由な認知症の方のほうが、自宅で介護しやすい  
という現象を招いている。

このような状況下では、早いうちに介護サービスを利用した方がよい、  
ということになるだろう。

「こじらせてしまう」前に、介護サービスを利用しておいた方が、  
「生活崩壊」を招く恐れも少なくなる。

これが僕の考える「早期発見」の意義であり、メリットである。

一般に「早期発見」と言うと、認知症の病理学的治療の方にばかり話が行くが、  
こうして早期に介護サービスを利用することも、  
認知症と付き合っていく上では大切な知恵だと思われる。

介護サービスはこうした大切な時期を担うものとして、  
頼りにされるべきものだ。

その役割を果たせるような質の向上に努めなければならないことは言うまでもない。

そうすると、認知症の重い人はみれません、などとは口が裂けても言えなくなる。

もちろん精神疾患等で、介護の領域では解決できない症状もあるが、  
原則、認知症という障害に関しては、  
その介護を専門に行える「スキル」と「心」が求められている。

\*

認知症は恐ろしい障害だと思う。

しかしこれからの時代、多くの人避けられないものであり、  
だとすれば、認知症になっても安心して生きていけるように考えることが大切ではないか。

認知症を恐ろしい障害と考えるあまり、

「早期発見」「早期治療」「認知症予防」ということが叫ばれて久しいが、  
その一方で、既に認知症を持たれている方への視点も忘れないでほしい。

---

そうでないと、既に認知症を持たれている方は救われなし、  
ますます認知症に対する恐怖心や差別的意識を煽ることになるからである。

認知症の予防や治療に努めつつも、  
認知症になっても安心という社会を作ることが同時に必要だ。

そうでなくては、老いることが何とも恐ろしい社会になってしまう。

世界一の長寿国日本で、ご本人もご家族も長寿を喜べないようなことでは何とも悲しい。

環境問題や戦争、飢餓、といったことと同じく、  
高齢化という現象も人類の最先端の課題であると思える。  
人類の英知が試されている、とすら思えてくる。

介護に携わる者として、そんな広い問題意識を持ちつつ、  
目の前にいるお年寄りの笑顔を大切に作る、  
そんな仕事をしていきたい、と思っている。

---

## ■著者プロフィール

榊原 宏昌（さかきばら ひろまさ）

天晴れ介護サービス総合教育研究所 株式会社  
代表取締役



昭和 52 年、愛知県生まれ

介護福祉士、介護支援専門員

京都大学経済学部卒業後、特別養護老人ホームに介護職として勤務  
社会福祉法人、医療法人にて、生活相談員、グループホーム、  
居宅ケアマネジャー、有料老人ホーム、小規模多機能等の管理者、  
新規開設、法人本部の仕事に携わる

15 年間の現場経験を経て、平成 27 年 4 月「介護現場をよくする研究・活動」を目的として独立

執筆、研修講師、コンサルティング活動を行う。

著書、雑誌連載多数

講演、コンサルティングは年間 300 回を超える

4 児の父、趣味はクラシック音楽

ホームページ内のブログ、facebook は毎日更新中

天晴れ介護サービス総合教育研究所オフィシャルサイト

<http://www.appare-kaigo.com/> 「天晴れ介護」で検索



■保健・医療・福祉サービス研究会 介護事業コンサルタント

■ウェルフェア・J・ユナイテッド株式会社 介護事業運営コンサルタント

■C-MAS 介護事業経営研究会 スペシャリスト

■日本福祉大学 社会福祉総合研修センター 兼任講師

■稲沢市介護保険事業計画策定委員会、地域包括支援センター運営協議会、地域密着型サービス運営委員会委員

■出版実績：日総研出版、中央法規出版、ナツメ社、その他音声講座の制作・販売

■平成 20 年第 21 回 G E ヘルスケア・エッセイ大賞にてアーリー・ヘルス賞を受賞



---

10分で読める！介護現場をよくするシリーズ（0003）

「認知症は生活崩壊の元、とは言いたくない！！ ー早期発見の意義再考ー」

（平成20年第21回GEヘルスケア・エッセイ大賞アーリー・ヘルス賞受賞作品）

---

平成30年8月1日 発行

企画・編集・発行 天晴れ介護サービス総合教育研究所 株式会社

代表取締役 榊原 宏昌

〒492-8435 愛知県稲沢市中之庄町辻畑13番地1

TEL 090-6592-0390 MAIL sakakibara1024@gmail.com

HP <http://www.appare-kaigo.com>

---

許可なく転載を禁ず